

第四章

各地の車人形



各地の車人形

本章では、西川古柳座もしくは八王子ゆかりの車人形を取り上げる。また、近隣各地の車人形の概要も述べる。

一 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 車人形資料

早稲田大学坪内博士記念演劇館に三番叟人形一点【写真1】と共にくろくろ車一点【写真2】が収蔵されている。くろくろ車には「寄贈八王子市 平音次郎 昭和五年七月」との墨書がある。

三田村鳶魚は昭和五（一九三〇）年六月十五日の日記に「八王子へ車人形見物、今度は冠十郎も出演する由、未だ冠の操法を見ず、それゆゑ出掛ける。松門寺にて雨ふり出でて、平へ一宿する。」と記している【柳澤和子二〇〇〇二六二〜二六三頁】。河竹繁俊も、八王子市寺町の松門寺で車人形を観覧し、「この日遣った三番叟の車人形は衣裳全部に車の装置等を取揃へて、本大学の坪内博士記念演劇博物館へ近日中に平氏から寄付される」と記している【河竹繁俊一九四六二四一頁】。

なお、河竹繁俊は、昭和四（一九二九）年、『民俗藝術』に「演劇博物館からのお願ひ」として、開館した早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に展示する様々な演劇資料の収集を目指していることを説明している。そのため『民俗藝術』の読者へのお願ひとして「諸方

面からの資料ないし報告の御寄贈をお願いする」と結んでいる【河竹一九二九】。『演劇博物館五十年』にも、昭和三（一九二八）年、演劇博物館の建物ができ、博物館の資料は、「寄贈品によってまず充実を計るしかない」状況であったことが説明されている。

二代目西川古柳による「車人形売込覚」に、松門寺での公演の「連中」として「瀬沼、中村、丹沢、丹秀、長畑、内田、末吉、平吾、冠十郎、周助」と記されている【多摩文化研究会一九六八一九八頁】。「瀬沼」「周助」の記載より、二代目西川古柳と三代目西川古柳も共に興行していると思われる。

三番叟人形は、昭和四十六（一九七二）年パリ、ミュージゼ・ド・ロームで開催された「日本、生きている千年の演劇展」においても展示されている【早稲田大学坪内博士記念演劇博物館一九七八】。

三番叟人形の法量は首縦約十三センチ×横約十センチ、返り目、口開き、下がり眉。返り目は一般に二変化だが三変化する。目がやや上がり気味とやや下がり気味、白目（剥落か）。右手には扇を持ち、

左手の持ち手は棒状である。装束は背に五色の鶴が描かれている。



写真1



写真8



写真6



写真4



写真2



写真9



写真7



写真5



写真3

- 写真1 八王子車人形「三番叟」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真2 ろくろ車「寄贈 八王子市 平次郎様 昭和五年七月」と書かれている。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真3 八王子車人形「三番叟」目 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真4 八王子車人形「三番叟」目の変化1早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真5 八王子車人形「三番叟」目の変化2早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真6 八王子車人形「三番叟」人形後ろ姿 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真7 八王子車人形「三番叟」部分 左手の棒 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真8 写真1部分 足のかかり早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537
- 写真9 三番叟人形 右手早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵 資料番号537

(調査日 平成三十(二〇一八)年七月六日)

二 小松家所蔵車人形資料

八王子市日吉町の小松家に、日吉八王子神社宮司であった小松茂盛(二八九九—一九七〇)によって収集された車人形資料四十三点が保存されている。これらの資料は『説経節研究—歴史資料編』の小松茂盛日記抜粋の項に、首五点とろくろ車一点が「初代西川古柳が愛用したとされる車人形」として掲載されている「説経節の会二〇一五—一七三頁」。

人形用具資料の総数は、首は二十八点、手四点、足六点、ろくろ車一点であった。

(二) 人形の概要

小松茂盛は、戦前戦後を通して車人形に深くかかわった人物の一

人である。

昭和四（一九二九）年、檜原（八王子市）のごぼう畑で縄文式土器を発掘したことをきっかけに安西英男と「陸東土俗研究会」を結成、昭和八（一九三三）年には天野佐一郎、関沢銀蔵らと「薩摩説教節保存会」を創立。説教節を三代目薩摩港太夫・初代都太夫・本名河合幸三郎（慶応二年八月二十日〜昭和十年二月五日）に石川浪之助・峰尾孝次・丸山秀治郎（浜寿）らと入門しており「宮川 一九八九 二八頁」、「昭和九年六月四日（中略） 小松茂盛」の記載のある説教本『一の谷嫩軍記』（小松家所蔵）も残る。石川浪之助（後の十一代薩摩若太夫）、峰尾孝次（後の三代都太夫）は後に、西川古柳座の座付きの太夫となっている。小松茂盛は戦後も車人形の保存に関わり、久米井亮江は「車人形を世に紹介した人々」として小松茂盛を紹介し、「昭和三十一年六月車人形後援会結成後は事務所において会の運営に当たっていた」、「車人形うつしゑの蒐集に努め八王子市日吉町の自宅には一般的な民俗資料の研究資料を多く集めて保存せられている」と説明している「久米井亮江 一九八三二五三〜二五四頁」。

人形の来歴に関しては不明である。小松茂盛の孫である小松美子氏は資料入手の経緯等は聞いていないという。しかし、以下のようなことが伝わる。

新藤恵久所蔵の小松茂盛の車人形関連の文書のコピーに記されたメモに「小松茂盛の首は馬場谷戸↓元本郷 関沢銀三（ママ）↓誠」「桐を買って自分で刻った」と書かれているが、詳細は不明である。小松茂盛の記した文書の中で「薩摩説教節保存会」を設立した当時を記した日記は「小松茂盛日記」として『説教節研究』に翻刻されている。メモは未翻刻の一連の文書の中に別の筆跡で書き込まれている。吉田冠次郎（丹沢秀）は昭和三十四（一九五九）年三月一日（日

付に関しては「久米井亮江 一九八三二八四頁」に

「〔初代の〕西川古柳さんという人の持ちものだった人形がそっくり売り物に出ましてね、わっしの親父と長畑さんという人が金を出して、そいつを買い取ったんです。それでわっしに人形遣いを習わした訳なんです。その人形は惜しいことに焼いてしまっただけ、今はありません。関沢銀蔵さんの所で保存してもらっていましたが、戦災でみんな焼いちゃいました。（中略）古柳からゆずり受けた頭も二つ三つは残っています。幽霊の頭と他に何だったか、なんであんまり出来のいい頭じゃありません。」と述べられている「説教節の会 二〇一五 一四九―一五〇頁」。

新藤恵久所蔵の小松家資料に書き込まれたメモの内容と併せて考えると、小松家所蔵の車人形の首は、幽霊の首も含まれている点は関沢銀蔵が保管していた丹沢秀旧蔵初代西川古柳の首と類似している。なお、小松家所蔵の首の内側に、一部焼き付けが出来ず、字が欠損しているが、丸に秀の字の焼印が押され、秀と墨書された

ものが一点ある【写真13〜15】。斎藤清二郎の文楽首の作者と焼印」を参照すると、ほぼ同一の丸に秀の焼印の図が掲載され、「吉田冠十郎 山崎秀雄」と書かれている「斎藤 一九五三二二頁」ことから、この首が吉田冠十郎旧蔵の可能性も考えられる。久米井亮江は吉田冠十郎の本名を山崎英雄と説明しているが「久米井 一九八三 一八九頁」、『模人形芝居 下中座のあゆみ』（九頁）では「山崎秀雄」と表記されている。



写真10 文楽首（小松茂盛記載） 小松家所蔵



写真13 「秀」の銘のある首内部 小松家所蔵



写真11 首 小松家所蔵



写真15 写真13銘 小松家所蔵



写真14 写真13の首 顔面 小松家所蔵



写真12 手と足 小松家所蔵



写真18 三番叟人形 八王子市郷土資料館所蔵

三番叟人形はかつて久米井亮江が保管していたと思われる。その写真が昭和四十六（一九七二）年八月九日の朝日新聞の記事に見られる。久米井亮江の『晩春 武蔵車人形』に四代目西川古柳がこの三番叟人形を遣っている写真が掲載されている。「久米井亮江 一九八三—一九七頁」。八王子市郷土資料館発行の『写し絵 車人形 説経節』に三十頁には使用者瀬沼時雄

八王子市郷土資料館には衣裳付きの三番叟人形【写真18】一点、と娘の人形【写真20】一点が所蔵されている。娘の人形は昭和五十六（一九八二）年に八王子市郷土資料館が四代目西川古柳より購入したものである。本書付録DVD所収の「ろくろ車」（一九五八年）に車人形を説明する四代目西川古柳の傍らに置かれており、かつて西川古柳所蔵であったことが伺われる。

三番叟人形はかつて久米井亮江が保管していたと思われる。その写真が昭和四十六（一九七二）年八月九日の朝日新聞の記事に見られる。久米井亮江の『晩春 武蔵車人形』に四代目西川古柳がこの三番叟人形を遣っている写真が掲載されている。「久米井亮江 一九八三—一九七頁」。八王子市郷土資料館発行の『写し絵 車人形 説経節』に三十頁には使用者瀬沼時雄

三 八王子市郷土資料館所蔵 衣裳付き車人形



写真16 足 小松家所蔵

（調査日 平成二十九（二〇一七）年九月四日）



写真17 ろくろ車 小松家所蔵

(四代目西川古柳 筆者注)か」と紹介されているが、五代目西川古柳はこの人形が西川古柳座で使用された記憶はないと述べている。



写真19 三番叟 左手の棒 八王子市郷土資料館所蔵



写真20 娘人形 八王子市郷土資料館所蔵

(調査日 平成三十(二〇一八)年三月二十九日)

四 八王子市郷土資料館所蔵

秋間一昇座旧蔵車人形資料

また、八王子市郷土資料館には秋間一昇座旧蔵車人形資料が所蔵されている。

秋間一昇一座で使用された車人形道具二二五点は、後に十代目薩摩若太夫三男の内田常雄氏より八王子市郷土資料館に寄贈された。

【写真21～25】

秋間一昇座は、戦後の昭和三十年代から五十年代にかけて興行した車人形的一座である。世話役の秋間一昇と西川古義、西川古昇、西川古光、内田タミ子という四名の人形遣いの他、説経師の薩摩若太夫の六名で構成されていたとされる「八王子市郷土資料館

二〇〇七三四頁」。西川古柳座と隆盛を競い、一九六二年には西川古柳座とともに東京都無形民俗文化財に指定された。『東京都の文化財 二』(二九六七)によると代表者は秋間一昇、住所は八王子市子安町三丁目九八番地とある。ちなみに西川古柳座は「瀬沼周助一座」と記載されている。

秋間一昇座は戦前にその前身があり、昭和十一(一九三六)年一月二十三日の東京日日新聞府下版によると、「武蔵野の郷土藝術の中に特異な光彩を放っている車人形の初代家元西川古柳の遺族が」「命脈を保っている八王子の薩摩説教節車人形保存会」代表秋間一昇氏に対し、家元の樹立と二代目西川古柳の選定をあっさり一任して来た(傍線筆者)という記事に示されている。

記事にはさらに「なほこの家元再建依頼を記念し初代古柳が愛用し七十年からの由来をもつ貴重な車人形一揃いが所蔵者の八市大横町平音次郎氏方から保存会へ寄贈され、ここに二代目家元と名品が一度に集まったわけで同会も有頂天の喜びようである」(傍線筆者)と書かれている。

河竹繁俊は昭和二十四年(一九四九)年刊『諸国の人形芝居』のあとがきにおいて、八王子の車人形について「平氏(平音次郎)の没後は秋間氏が郷土芸能として面倒を見てをられるので、いまでもまとまった座組になっているようだ」と記しており、当時、秋間一昇氏他が八王子の車人形伝承の一翼を担っていたことが伺われる。

秋間一昇座という人形座の成立に関しては、「戦後、まもなく八王子市子安町の秋間一昇という人が、説経節の薩摩若太夫などに呼びかけて多摩村(現多摩市)の車人形使いの宿村玉太郎(芸名西川玉造)などを加え秋間一昇座を結成し、NHKなどに売り込んでいた」(傍線筆者)「新藤二〇〇二六五頁」という記録から関戸の人形座(次項五、車偶庵:参照)との関わりがあったことが伺われる。

『新八王子市史 民俗編』(二〇一七)によれば、秋間一昇は昭和



写真21 秋間一昇座使用の首 八王子市郷土資料館所蔵



写真22 鬼の首 八王子市郷土資料館所蔵

三十七（一九六二）年説経節大夫内田総淑の十代目薩摩若太夫襲名にも関わっている。

秋間一昇座は戦後の昭和五十年代まで興行が確認される。興行の様子は昭和四十六（一九七二）年九月四日朝日新聞に二日（一九七一年九月二日）夜、東京有楽町の朝日講堂で、第二回「観光資源を守る集い―講演と郷土芸能の夕べ」の様子として「出演したのは西川車人形座」で「リーダー格の秋間一昇さんが仕掛けを解説する。そのあとが呼物の「日高川」で、清姫を西川（古義）さん、舟長（ふなおさ）を秋間さん」「小ぶりの人形だが、その衣装も見事、ツノが生え、川を渡り切るとおのが姿を川面に映し……。あら、あさましやー両眼から豆電球が灯り、ピカピカ光り出した。これは最近の改良だろうが、観客は大喜びで、盛んに拍手かっさい。」「西川古義さんは本名が内田義雄、もう一つ芸名があつて千鳥新太郎。座員十五人の座長で、祭典興行専門に芝居をして回っている」と記されている。

昭和五十（一九七五）年には年間七回ほどの公演を行っていたが、次第に座は縮小し昭和五十六（一九八二）年五月六日、秋間一昇の死亡により座としての活動が行われなくなり、東京都無形民俗文化財保持団体の認定が解除された。「八王子市市史編集委員会

二〇一七 四六二頁」によれば十代目薩摩若太夫は東京都指定無形文化財（芸能）説経浄瑠璃として追加認定された。

人形には先の新聞記事にある、両眼に豆電球を仕込み、ピカピカ光る仕掛けの首がある【写真22】。



写真23 足のかかり 八王子市郷土資料館所蔵



写真24 ろくろ車 八王子市郷土資料館所蔵



写真26 十代目薩摩若太夫七周年記念に贈られた花輪の垂れ布 八王子市郷土資料館所蔵



写真25 三番叟の公演時の様子 倉持承功撮影 平凡社カラー新書44『日本の人形芝居』より「説経浄瑠璃の七福神舟歌に合わせ、かろやかに舞う」[都下八王子市の西川車人形]と書かれている。

（調査日 平成三十一（二〇一九）年三月二十九日）

なお、秋間一昇一座の車人形は、昭和四十（一九六五）年、テレビで見た中央大学ドイツ人講師らが称賛した。これをきっかけに、一座は五年がかりで作った「小栗判官一代記」の人形三体他を、ドイツ大使館を通じてミュンヘン市立博物館に寄贈している。（昭和四十（一九六五）年七月三日朝日新聞「車人形が西独へ」ミュンヘン市立博物館に寄贈）薩摩若太夫の略歴の中にも「昭和四十年七月二日西ドイツミュンヘン博物館二車人形寄贈致す事ト成り七月二日東京麻布広尾町ドイツ大使館に於テ車人形伝達式有リ小栗判官照手姫万屋長右エ門大使館ヨリ感謝状受ク」と書かれている「多摩文化研究会一九六八八九頁」。

薩摩若太夫に宛てたドイツ大使からの感謝状が八王子市郷土資料館に所蔵されている。先述の朝日新聞およびニュルンベルク新聞（一九六五年七月十日）、一九六五年七月三日の毎日デイリーニュースは秋間一昇一座が車人形資料を寄贈したことを報じている。



写真27 人形写真 左より小栗判官、照手姫、長右衛門 ミュンヘン市立博物館提供 ©Münchner Stadtmuseum



写真28 照手姫の首「若太夫」と書かれている。ミュンヘン市立博物館提供 ©Münchner Stadtmuseum



写真29 人形遣いの衣裳とろくろ車 ミュンヘン市立博物館提供 ©Münchner Stadtmuseum

五 八王子市郷土資料館所蔵 車偶庵民俗文化資料館旧蔵 車人形資料

郷土玩具収集・研究家として名高い石井丑之助（一九一一年一九九三）が所蔵していた資料である。石井丑之助は昭和六十（一九八五）年、千葉県茂原市に私設の車偶庵民俗文化資料館（茂原市中善寺一〇五六）を開館、自身の収集した人形・郷土玩具・民具等資料を収蔵、展示していた。同館は石井氏没後の平成二十九（二〇一七）年まで存続した。

石井丑之助の人形収集については、昭和二十九（一九五四）年二月二十三日の読売新聞「車人形への郷愁から」という記事に語られている。多摩川べりに育った石井が「生命の通ったもののように操られる文七や与勘平、新造や傾城などの時代物、世話物の人形芝居に魂を奪われた」こと、初代西川古柳の生家、友人を訪ねたこと、車人形にちなんで「車偶庵」と称して収集していると説明されている。同館所蔵の車人形資料は二十二点。【写真30】から【写真41】は石井丑之助『車人形』（私家版、新藤恵久所蔵。同書は「石井一九九四」に所収）で示されているものである。中には石井の覚書ともいえる



写真30



写真31

紙片・紙貼の付けられたものがある。紙片・紙貼には「関戸の人形座」【写真32】、「神奈川県津久井郡牧野村」【写真34】とある「大谷津二〇一八」。その他、「八王子車人形」【写真42】「小泉因幡」【写真44】、「若松若太夫老」【写真46】という紙片・紙貼も見られた。

関戸の名は、小田内通久が『民俗藝術』（一九二八）年、車人形調査の記録として「多摩村の関戸にもあるといふ」と書いている「小田内一九二八五四頁」。沼謙吉は、多摩市発行『多摩市史 通史編二 近現代』にて、多摩村関戸は正しくは東寺方ではないかとし、東寺方の宿村家に車人形が伝えられていると説明している「沼一九九九一九七頁」。

沼謙吉によれば「宿村家は農業を営んでいたが、主・玉太郎（二八五九―一九四二）は車人形の遣い手であった、芸名は西川玉造を名乗り、八王子の興行師秋間一昇についていた。土蔵の二階には人形や人形衣装、それに説経本が残されていたというのが今はない」という。また沼は、宿村家の人形が多摩村和田の柚木浅次郎（一八三八―一八九八）旧蔵のものであり、柚木浅次郎の日記の中に明治二十（二八八七）年十月二十九日の一円「八王子の柳寿エ人形頭二ツ代内金」とあり、初代西川古柳の弟子の小町源三郎の名が見られると書いている。柚木浅次郎の墓石には三番叟を演じている車人形が彫られているという。

平成二十九（二〇一七）年十一月、八王子市に寄贈され現在八王子市郷土資料館に収蔵されている。

写真30 文七 関戸の人形座旧蔵（「車人形」石井丑之助より）八王子市郷土資料館所蔵

写真31 老け女形 古作（「車人形」石井丑之助より）八王子市郷土資料館所蔵

写真32 つめ首 紙片に「昭和十三年 関戸人形座」と書かれている。八王子市郷土資料館所蔵

写真33 つめ首 八王子市郷土資料館所蔵

写真34 写真33の部分 紙片に「牧野村」と書かれている。八王子市郷土資料館所蔵

写真35 婆 八王子市郷土資料館所蔵

写真36 むすめ 八王子市郷土資料館所蔵

写真37 文七 「文七の人形は若山の松岡英之助氏より贈呈品・文楽座所蔵の逸品（明治初期）」という石井丑之助による解説文が付けられている。足にはかかりが付けられている。八王子市郷土資料館所蔵



写真36



写真34



写真32



写真37



写真35



写真33



写真46



写真44



写真42



写真40



写真38



写真45



写真43



写真41



写真39

東京都調布市の調布市郷土博物館（調布市小島町三丁目二六―二）には玉川文楽旧蔵車人形資料が一四八点寄託されている。

初代玉川文楽（薫森利三郎一八六一―一九二七）が饅頭屋であったことから旅芸人との交流もあり、説経節や車人形、写し絵を覚え、玉川文蝶（野和田文永一八一九―一九〇二）に入門、八王子を中心に車人形や写し絵を興行して回った。初代の次男である二代目玉川文楽（薫森亮一八八五―一九五九）も車人形と写し絵の興行をした「八王子市郷土資料館二〇〇七―一三頁」。萬屋長右衛門は『民俗藝術』第二巻第四号（昭和四年四月）に二代目玉川文楽へ聞き取りをし、当時二代目は写し絵よりも車人形を得意としていたこと、「玉川文楽の車人形は、八王子のより大きい」と述べ、首八点の写真を掲載して

六 調布市郷土博物館寄託資料、玉川文楽旧蔵車人形資料

（調査日 平成二十九（二〇一七）年七月十八日、八月二十一日）



写真47

- 写真38 お福 「お福の人形は車人形の創業者の一人と言われた西川古柳の愛蔵品である」という石井丑之助による解説文が付けられている。八王子市郷土資料館所蔵
- 写真39 団七 関戸座で弁慶に使われていたという。（「車人形 石井丑之助より） 八王子市郷土資料館所蔵
- 写真40 むすめ「衣裳姿は「日高川入相櫻の清姫」である」（「車人形 石井丑之助より） 八王子市郷土資料館所蔵
- 写真41 首 八王子市郷土資料館所蔵
- 写真42 写真41胴串「八王子車人形 座主」と書かれている。八王子市郷土資料館所蔵
- 写真43 首 八王子市郷土資料館所蔵
- 写真44 写真43の胴串「八王子車人形小泉因幡座」と書かれている。 八王子市郷土資料館所蔵
- 写真45 首 八王子市郷土資料館所蔵
- 写真46 写真45の胴串「車人形のつめ 四個口 若松若太夫」と書かれている。八王子市郷土資料館所蔵
- 写真47 ろくろ車 八王子市郷土資料館所蔵



写真49 三番叟首 調布市郷土博物館寄託



写真50 娘首 調布市郷土博物館寄託



写真48 首 調布市郷土博物館寄託

幕には「千葉縣浦安村」とあり【写真60】、興行先が千葉県にまで及んでいたことがわかる。また、小道具の中には「明治四拾四年」とあり【写真61】、活動時期が推定される。

いる。
昭和九（一九三四）年、西川説児は『多摩史談』二一四に「車人形の発生とそのテクニクに就て」を掲載し、「人形の分布と系統」を図示し、「西川柳時↓調布」と記しているが「西川一九三四五〇頁」、西川柳時（三代目西川古柳）と調布の車人形を結び付ける資料はこれ以外には確認されていない。
昭和二十五（一九五〇）年九月九日に二代目玉川文楽による写し絵（地方（じかた）は後の十代目薩摩若太夫の説経節）を見た芝綾子は、「二代目文楽さんと太夫さんとは主に車人形でのコンビを組んでいた間柄でした。文楽さんは若い頃車人形を遣う為に、当時名人と言われた雀屋和三郎（剃刀で三味線を弾いたといわれる程の人）に就いて芸の技をあげる為一緒に門付け迄した」と書いている「芝綾子一九九五三七頁」。

車人形資料には首二五点、ろくろ車四点、幕六点、小道具等がある。



写真55 三番叟足 調布市郷土博物館寄託



写真53 足 調布市郷土博物館寄託



写真51 娘首と面 調布市郷土博物館寄託



写真56 足つき衣裳 甲冑の内側の衣裳と思われる。調布市郷土博物館寄託



写真54 三番叟衣裳 調布市郷土博物館寄託



写真52 手 調布市郷土博物館寄託

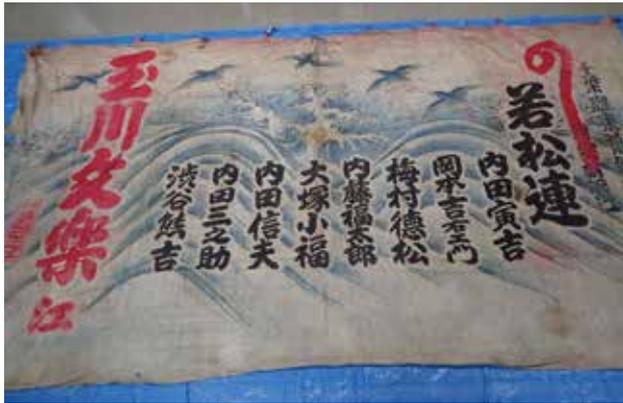


写真60 幕 右端に「千葉県東葛飾郡浦安村」と書かれている。調布市郷土博物館寄託



写真57 甲冑 調布市郷土博物館寄託



写真62 札「玉川文楽屋連中 大當り仕 大入叶」と書かれている。調布市郷土博物館寄託



写真61 札 裏「明治四拾四年二月吉日東京府 北多摩郡調布町国領 月日」と書かれている。調布市郷土博物館寄託



写真59 写真57の衣裳の内側「玉川」と書かれている。調布市郷土博物館寄託



写真58 女形衣裳 調布市郷土博物館寄託

埼玉県三芳町立歴史民俗資料館（入間郡三芳町大字竹間沢八七七番地）には、竹間沢車人形資料が寄託されている。竹間沢にも車人形が伝承されており、大正一〇（一九二一）年の興行を最後に中断していたが、昭和四七（一九七二）年に復活、現在三芳町指定無形民俗文化財、用具は埼玉県指定有形民俗文化財となっている。

由来歴史について、『埼玉県の人形芝居用具 下巻』（埼玉県教育委員会 一九八三年）によれば、竹間沢の人形芝居は、安政年間（一八五四―一八六〇）に入間郡竹間沢村で神楽師をしていた前田左吉（一八四一―一八八六）のもとに、西多摩郡二宮村（現東京都秋川市）で人形芝居の座元として活躍していた説経浄瑠璃六代目家元薩摩若太夫の長女古谷ていが嫁入り道具の一つとして小さな豆人形の人形芝居用具一式を持って嫁いできたことにより始まる。前田左吉はていの実家の二宮の応援を得て人形芝居を習得、吉田三芳と名乗り、三芳座を結

七 三芳町立歴史民俗資料館寄託 竹間沢車人形資料



写真63 ろくろ車 調布市郷土博物館寄託

（調査日 平成三十（二〇一八）年九月十四日）

成し興行した。幕末から明治初期に、当時西多摩郡下で盛んに行われていた車人形の影響を受け、豆人形から車人形に変わったとされる。現在残っている首やろくろ車は、前田左吉やその息子民部が自作したとされている。

竹間沢車人形保存会家元の前田益夫（昭和十（一九三〇）年生まれ）への聞き取り（二〇一八年九月十三日 聞き手 大谷津早苗）によれば、「車人形は地元の人形芝居とは違う江戸の人形芝居で、ろくろ車は箱部分を作ることはできても車輪を作り、中央に穴をあけることは専門技術を要する。二宮には木地師が多く、ろくろ車は（車人形がはじまったころ）二宮でいただいできた。前田家は神楽の面を作っていたので人形制作の技術があり、人形の首も作ることができた。大正十（一九二二）年の興行を最後に公演は行われていなかったが、前田家と近所の人は人形道具があることは知っていた」という。昭和四十六（一九七〇）年、埼玉県教育委員会の県内の人形芝居の緊急調査を機に、唯一の伝承者前田近（前田益夫の叔父）が指導し、翌年復活上演を果たした。



写真64 首 竹間沢車人形保存会所蔵

現在は、竹間沢車人形保存会により伝承されている。車人形には十八名が携わっている。地元の人だけではなく、六十代の古い人と新しい人がいる。大人、高校生、中学生、男女ともにいる。昔は農家の人が多かった。毎週水曜日に稽古し、十二月にコピス三芳で公演している。平成二十九（二〇一七）年十二月三日公演の上演演目は「日滝の笛（信州の民話より）」（地方は上富嶮子保存会および講演 宝井梅福）「壺坂観音霊験記」（地方は説経節 三代目若松若太夫）などである。月に一回学

校にも行き、車人形を八校で紹介している。

前田氏は、神楽の前田社中を率いて活動する。川越、浦和、板橋、池尻、赤羽などと呼ばれていくことがあるという。社中のメンバーは一部車人形と重なる。

寄託されていた車人形資料は、首二十四点、手四点、足一点、ろくろ車一点。首は自作、重量感があり、山車人形のような表情が特徴である。首内に「眠 大正元年九月」の銘がある。ろくろ車には「明治廿年壬辰八月二日」の墨書がある。



写真65 景清首 竹間沢車人形保存会所蔵



写真67 写真66の首の変化 竹間沢車人形保存会所蔵



写真66 三番叟首 竹間沢車人形保存会所蔵



写真68 鬼の首 竹間沢車人形保存会所蔵



写真69 首の内部 竹間沢車人形保存会所蔵



写真70 手足 竹間沢車人形保存会所蔵



写真71 ろくろ車 竹間沢車人形保存会所蔵



写真72 衣裳つき人形 竹間沢車人形保存会所蔵



写真73 竹間沢車人形公演『小栗判官 親子対面矢取の段』1995年2月19日狭山市市民会館小ホール 三芳町教育委員会提供

(調査日 平成三十(二〇一八)年九月十三日)

八 奥多摩水と緑のふれあい館収蔵 川野の車人形資料

東京都西多摩郡奥多摩町の奥多摩水と緑のふれあい館(東京都西多摩郡奥多摩町原五番地)には川野の車人形資料が寄託展示されている。川野の車人形は川野車人形保存会によって継承され、昭和二十七(一九五二)年東京都指定無形民俗文化財となっている。

由来来歴について、『東京都の民俗芸能』(平成二十四(二〇一二)年)によると一八八五年に十里木の太夫・木住野(きじの)清兵衛が川野に車人形を伝えたことに始まる。名手河村佐太郎は、初代西川

古柳の指導を受けたとされている。

小河内にはもとは数カ所あったが残るのは川野のみと、廣川清『三つの人形芝居』(吾妻書房一九六三年一五四〜一六〇頁)には記されている。廣川清は一色四郎「人形師の里」『郷土芸術』昭和九年十一月号を引用し、次のように記している。

川野には、車人形が伝わる以前から人形芝居が行われていたという(同書)。車人形以前の人形について、土地の古老で松守五助翁(七十九才)は「立ち遣ひ、突込式の一人遣ひの人形」といい、本田部落の河村佐太郎翁談として「もとは三人遣ひの形式」という。また、土地の名家河村政紀氏も「上半身を一人、両足を別人にて遣ひたるもの」と答えている[廣川一九六三・一五五〜一五七頁]。

まず、歴史的経緯であるが、昭和十二(一九三七)年三月七日の朝日新聞によると、小河内ダム建設にともない、「沈み行く村」最後の宴ともいべき祭りが昭和十二(一九三七)年三月五日に催され、古谷五郎宅にて十三年ぶりに車人形が演じられた。「小栗判官一代記」、「出世景清一代記」が午前一時頃まで演じられたという。昭和二十七(一九五二)年、湛水直前の小河内村で、東京都は郷土芸能の調査をし、獅子舞や神楽と共に車人形を都の無形民俗文化財に指定した。昭和四十六(一九七二)年、東京都の補助金で人形の修理復元が行われることになり、川野車人形保存会が結成された[「はちおうじ車人形研究会一九九五三三頁」]。

川野の説経節は、川野に車人形を伝えた木住野清兵衛に説経節を教えた七代目薩摩若太夫が、義太夫の演目や曲節を取り入れていたため、川野に伝わる説経節にはその影響がある。「東京都教育庁二〇一二」

現在の活動としては、毎年三月五日の箭弓(やきゅう)神社祭りに、早朝の例大祭の後、午後川野生活館で上演される。三月第二日曜日から、奥多摩水と緑のふれあい館においても上演される。演目は

「御祝儀三番叟」「宗吾と甚兵衛」「盛俊注進の段」「東海道中膝栗毛 赤坂並木の段」等である。

川野車人形保存会代表河村良知氏（昭和二十九年二月十八日生まれ）及び川野車人形保存会前代表本沢陽一郎氏（昭和九年四月三十日生まれ）への聞き取り（聞き取り 大谷津早苗）によると、「古くから車人形をやっている人は河村氏、本沢氏を含む四名（六十代一名、八十代三名）、学校でも指導して中学生、高校生、大学生と次世代が育っている。三味線、太夫とも近年増えた。」という。

また、首の来歴については、「川野車人形の首は二カ所からやってきたと聞いている。檜原にも車人形があり、借りてきたのだと。しかしそのことを記憶している人にはあつたことがない。檜原に返さなくてはと思つている（本沢氏）」、「（四代目）西川古柳氏の紹介で首十体ほどを大修理した。胴串も変えた。このとき以外は塗り直してない。（本沢氏）」という。杉田芳春は昭和四十（一九六五）年川野車人形保存会で首を修理することになり斎藤清二郎（二八九四―一九七三、人形の首の研究者、後出、筆者注）に相談し三十一個の首を見せたことを記している。「杉田 一九八三二六〇二七頁」梅田和子は、「斎藤清二郎氏を通じ昭和四十五年から数年にわたり、人形首十一個を、順次、塗り替え、頭髮、眉の補修、曲なおしを行なつた」と記し、十一個を列挙している。「梅田 一九八三二八〇三五頁」ふれあい館展示の人形、首のうち、景清【写真77中央】、むすめ【写真77右】、阿古屋というキャプションのついた女（老け女【梅田 一九八三二九頁】）【写真74左から三番目】が該当すると思われる。（写真74の右端四体の首は、梅田論文掲載写真と比べると明らかに塗り直していると思われるが梅田論文で記録された斎藤清二郎塗り直しの首には含まれていない。）さらに、本沢氏は「首のサイズが小さいものが本来の川野の車人形の首で文楽のような大きめのサイズのものが檜原からきたものではないかと思つている」と述べられた。梅田和子は川野車

人形の首について、「明治十八（一八八五）年に、小宮の木住野清兵衛が地の説経浄瑠璃と共に、人形一式を持ってきて伝えたといわれている。その後、檜原村数馬からも借り入れて数をふやした。借り入れた時期は（中略）諸説あつて定かではない」と記している「梅田 一九八三二八頁」。原嘉文は、十里木の木住野清兵衛と養沢（現在のある野市）の車人形一座の興行が檜原村出畑の宇田家に伝わる『牛五郎日記』に記録されていること、また大正十三（一九二四）年ころ養沢で車人形を見た記憶のある方への聞き取りについて記し、『檜原村史』に檜原村数馬にも車人形がかつて存在し、「ここ数馬の道具一式は現在の川野車人形に活用されているといわれるが確証はない」と書かれていると指摘している。「原 一九九五五九頁」

足とろくろ車について河村良知は「ろくろ車の車輪が減るので、木工所に車輪（檜の木）の制作を依頼している。箱は自分たちで作っている。油を指して使う。足はかつては人形のかかるとに木を挿入し作つたが、今はT字型の枝を利用して作っている」と述べている。



写真74 首 川野車人形保存会所蔵

保存会には首は五十点ほどあるという。現在、ふれあい館には、衣裳付きの人形三点と首十二点を展示。首の残りは、川野の獅子舞の道具と共に、川野生活館の倉庫に保管する。

川野の首の景清は、斎藤清二郎『日本の〈首〉かしら』（岩崎美術社 一九六四年一五一頁）において、「江戸系の寛政（二七八九―一八〇〇）以前と推定される二十数個の首があり、今は車人形に類用している」と紹介された。景清はかつて伝承され



写真77 衣裳つき人形 左よりさむらい、景清、人丸姫。川野車人形保存会所蔵



写真75 金平の首 川野車人形保存会所蔵



写真78 写真77のさむらいの足 川野車人形保存会所蔵



写真76 鬼の首 川野車人形保存会所蔵

てきた演目である。
金平と赤鬼、青鬼の首も古浄瑠璃首とされ、これまで注目されてきた。しかし、今回の聞き書きでは「どのような演目に使われたものが全く分からない」「鬼になった蛇になったというところで使ったものかもしれないが、日高川は川野の演目にはない(本沢陽一郎)」ということであった。



写真79 ろくろ車 川野車人形保存会所蔵



写真80 川野車人形公演『東海道中膝栗毛』2019年3月9日 奥多摩水と緑のふれあい館

(調査日 平成三十(二〇一八)年九月十一日)

(執筆者 大谷津 早苗)

参考文献

- 小田内通久 一九二八「八王子車人形の話」『民俗藝術』1—5 民俗藝術の會五九頁
- 河竹繁俊 一九二九「演劇博物館からのお願ひ」『民俗藝術』第二巻第一号 地平社書房
- 河竹繁俊 一九四六『歌舞伎襖記』光文社
- 石井丑之助 一九四七『車人形』こけし文庫
- 石井丑之助 一九九四『車偶庵の郷土玩具』国書刊行会
- 梅田和子「奥多摩町川野の人形芝居首について」
- 大谷津早苗 二〇一八「車偶庵民俗文化資料館旧蔵 伝相模人形芝居牧野人形のかしら」『昭和女子大学文化史研究』二一 昭和女子大学文化史学会
- 河竹繁俊 一九四九『諸国の人形芝居』大日本雄弁会講談社
- 久米井亮江 一九八三『晩春譜 武蔵車人形』
- 埼玉県教育委員会 一九八三『埼玉県人形芝居用具緊急調査報告書 埼玉の人形芝居用具(下巻)』埼玉県立民俗文化センター編集
- 斎藤清二郎 一九五三『文楽首の作者と焼印』『文楽首の名作』
- 斎藤清二郎 一九六四『日本の(首)かしら』岩崎美術社
- 相模人形芝居下中座 一九九八『相模人形芝居下中座のあゆみ』

芝綾子 一九九五「十代目薩摩若太夫」『多摩のあゆみ』八〇、たましん地域文化財団

新藤恵久「車人形の救世主」『うなづき—宗家柳峰追悼誌』西川古柳座 八王子車人形後援会

杉田芳春 一九八三「奥多摩町「川野の車人形」」『多摩のあゆみ』三三 多摩中央信用金庫。

説経節の会編二〇一五『説経節研究—歴史資料編』方丈堂出版

西川説兒 一九三四『多摩史談』二一—四

沼謙吉 一九九九「多摩村の車人形」『多摩市史 通史編二 近現代』多摩市発行

東京都江戸東京博物館 一九九九『川野の車人形 調査と映像記録 映像 音響資料制作に伴う調査報告』3

『東京都の文化財』二(一九六七)

東京都教育庁地域教育支援部管理課二〇一二『東京都の民俗芸能—東京都民俗芸能調査報告書—』

はちおうじ車人形研究会編『東京に残る江戸・人形芝居の世界 八王子車人形』のんぶる舎、一九九六年。

八王子市郷土資料館二〇〇七『特別展 写し絵・車人形・説経節』

八王子市市史編集委員会二〇一七『新八王子市史 通史編5 近現代(上)』

『新八王子市史 民俗編』八王子市

原嘉文 一九九五「西多摩の芸能史断章」『多摩のあゆみ』八〇 たましん地域文化財団

廣川清 一九六三「三つの人形芝居」吾妻書房

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 一九七八『演劇博物館五十年 昭和の演劇とともに』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

宮川孝之一 一九八九「五代目薩摩湊太夫 浅倉宗吾」仕置の段『日本文化の伏流 民衆芸能 説経節集「解説書 上巻、下巻」』CD付 法政大学多摩の歴史・文化・自然環境研究会(編集代表 小沢勝美・宮川孝之、法政大学多摩地域社会研究センター)

安田武 一九七六『日本の人形芝居』平凡社カラー新書44 平凡社
柳澤和子 二〇〇九「大正十三年の車人形東京公演をめぐる鳶魚と逍遥—坪内逍遥と三田村鳶魚の日記をたどって—」菊池明編『三田村鳶魚遺稿 明治大正人物月旦』逍遥協会
萬屋長右衛門 一九二九「玉川文楽の車人形と寫し絵」『民俗藝術』第二卷 第四号

若松若代志 一九六八「十代目家元薩摩若太夫一代」『多摩文化 第20号』多摩文化研究会

付記
西川古柳座所蔵、石井丑之助『人形浄瑠璃研究』(非売品、二十部限定出版) 一九五一年に記録された車人形に関わる人形座の説明を以下に引用する。

(1) 吉田冠十郎 吉田新三郎一座
昭和初期迄現存、都内各地で実演す。車人形、三人遣ひ、共に遣ふ、昭和五年十二月五日細樟による人形芝居として早稲田演劇博物館にて、早大民俗藝術の会で行はれたものが名高い。

(2) 八王子市小門町 小泉因幡座
座主、小泉因幡(雀屋妻三郎) 廃絶す、車人形、説経節にて演ず、戦災にて人形道具一切焼失。

(3) 南多摩郡横山村新地 丹沢彦太郎(薩摩浜尾太夫) 現存す、車人形、説経節にて演ず、実演は困難。

(4) 南多摩郡恩方村松竹 瀬沼時太郎人形座
座主 西川柳時(古柳の弟子) 実演可能、説経節にて演ず、現在の車人形中の優品である。

(5) 南多摩郡小宮村安戸 安戸人形座
座主、小町源三郎(西川柳壽、古柳の弟子) 廃絶、車人形、説経節にて演ず、人形のみ所蔵す。

(6) 南多摩郡多摩村東寺方 関戸人形座
座主 二代目 西川玉造(宿川佐兵エ) 廃絶す、車人形、初代西川玉造は車人形の名手として知らる。

(7) 西多摩郡小河内村 小河内人形座
部落の若衆組の共有であったが、東京都の水道用水池工事の際移住して行方不明、昭和初期まで実演す、車人形、説経節にて演ず。

(8) 北多摩郡多摩川調布町 玉川文楽座
座主 玉川文楽(薫森亮) 当主は二代目、釣道具屋を営業す。車人形、説経節にて演ず、現在実演可能、初代二代目共に人形の外に写し絵を得位とす。

(9) 印旛郡酒々井町 酒々井人形座
座主 若松元春太夫、現存するが実演は困難、座主は八王子の人神楽師、車人形、説経節にて演ず、明治の頃荒蕪地開墾の為、八王子

より移住し、其際伝来す。

(10) 北足立郡内間木村 内間木人形座

車人形、説経節にて演ず、明治末期廃絶。

(11) 熊ヶ谷市上石原 若松若太夫人形座

説経節家元十六代目、若松若太夫座主として一座をなし、現存、実演可能、車人形、帛紗人形共有す。

(12) 平塚市外金目村 金目人形座

座主 若松浜登太夫、車人形、説経節にて演ず、座主浜登太夫は八王子にて都賀太夫に師事し平塚に伝えたもの、廃絶。

(13) 足柄郡下中村 下中村人形座

座主 西川伊左工門（吉田冠十郎の兄）一人遣ひ、説経節にて演ず、現存、実演可能、車人形。



写真81 「人形浄瑠璃研究」

その他、永田衡吉は、山梨県鳴沢、群馬県品沢でも車人形が存在したことを述べている。「永田一九六九」